

日本における梁啓超著作の出版について

―『壬寅新民叢報彙編』と『飲氷室文集類編』を中心に―

張 淑君

はじめに

梁啓超は一八九八年から一九一二年まで十四年間にわたって日本の亡命生活を送った。彼は日本滞在中に『清議報』、『新民叢報』など一連の雑誌を創刊しただけでなく、いくつかの著書も出版した。一九〇四年に東京で出版された『壬寅新民叢報彙編』と『飲氷室文集類編』はその一部である。この両書を確認したところ、その編集者及び発行者はいずれも下河辺半五郎であり、印刷所は帝国印刷株式会社である。そのうち、『飲氷室文集類編』は、初めて日本人により編集され日本で出版された梁啓超の作品集であるとされている⁽¹⁾。これまでの研究においては、『壬寅新民叢報彙編』と『飲氷室文集類編』については少し触れられているものの、なお検討の余地は大いに残されている⁽²⁾。とりわけ、この両書の編集者且つ発行者である下河辺半五郎は如何なる人物であるか、両書の出版に帝国印刷株式会社と下河辺半五郎とがどのように関わっていたかなどについては、あまり目が向けられていない。

そこで本稿では、日本における梁啓超著作の出版に関して、『新民叢報彙編』と『飲氷室文集類編』を中心に、この両書の印刷所である帝国印刷株式会社や、その編集者及び発行者である下河辺半五郎や、両書と関連する書籍との違いについて考察を加えることで、両書がどのように編集、出版されたのか、両書がどのように関連書籍の編集に影響を与えたのかといった問題について考え、当時の日本における梁啓超著作の出版状況の一側面をより一層深めるための手がかりとしたい。

一 帝国印刷株式会社と梁啓超著作の出版

周知のように、一九〇二年、梁啓超の門下生である何肇一（字は天柱）はその丙申年（一八九六年）から壬寅年（一九〇二年）まで書いたものを集め編年体で編集し、『飲氷室文集』として広智書局より発行した⁽³⁾。その後、興味深いのは、一九〇四年に、下河辺半五郎は

梁啓超の癸卯年（一九〇三年）の春までの文章や著作をまとめ『飲氷室文集類編』に編集し、壬寅年（一九〇二年）梁啓超が創立した雑誌『新民叢報』に掲載された文章を『壬寅新民叢報彙編』にまとめ、東京の帝国印刷株式会社で印刷し、日清両国で発売したことである⁽⁴⁾。そこで、なぜ広智書局ではなく、帝国印刷株式会社より印刷され日清両国で発行されたのか、帝国印刷株式会社は、どのような会社であるのか、この会社は梁啓超とどのような関わりを持っていたのかといった一連の疑問が浮かび上がってくる。

管見のかぎり、帝国印刷株式会社に関連する記録は極めて少ない。稲岡勝は『明治出版史上の金港堂社史のない出版社「史」の試み』の一節「金港堂の七大雑誌と帝国印刷」で帝国印刷株式会社の経営と活動について考察を加えたことがある⁽⁵⁾。帝国印刷株式会社について、明治三十四年の『風俗画報』には、その創立時期や住所や組織など重要な情報が明記されている⁽⁶⁾。

帝国印刷株式会社 京橋区築地三―一五 木造平家間口二九間
奥行一二三間。明治三〇年（一八九七年）一〇月創立、資本金一〇万円。社長赤羽源治、重役五名、事務員七名、職工一八〇名あり。

右記の記録によると、帝国印刷株式会社は明治三十年（一八九七年）十月、東京京橋区築地三丁目十五で創立されており、資本金は十万円である。「職員一八〇名あり」から、創業してから四年間未満のうちに、帝国印刷株式会社はすでに相当の規模まで成長してきたことが分

かる。

更に調べてみると、『信用名鑑』と『活版印刷史』両書は東洋印刷株式会社の成立経緯を紹介する際、帝国印刷株式会社に言及していることが分かった。では、まず、『信用名鑑』の岡村竹四郎の紹介文の中から関連する箇所を引いてみよう⁽⁷⁾。

爾来信陽堂、合資会社活文堂、帝国印刷株式会社等ヲ経営シテ專心印刷界ニ貢献努力セシガ、明治四十年先輩諸氏ニ勸メラレテ前三社ヲ合併シ、東洋印刷株式会社トシ、厖大ナル工場ヲ起シテ君其取締役理事トナリ、殆ト其全權ヲ握リテ経営に当リ、漸次今日ノ隆盛ヲ見ルニ至リヌ、以上僅カ其單歴ニ過キズ。

引用文によると、岡村竹四郎は明治四十年（一九〇七年）諸先輩の勧誘を受け、信陽堂、活文堂と帝国印刷株式会社を合併し、東洋印刷株式会社を創立した。次に、『活版印刷史』に見える帝国印刷株式会社の記録を挙げる⁽⁸⁾。

明治三十九年（西曆一九〇六年）二月十二日、芝区愛宕町三丁目二番地に東洋印刷株式会社が創立された。その最初は岡村竹四郎の経営した有楽町の石版印刷所信陽堂、堀健吉を社主とする神田鎌倉河岸の写真製版印刷所猶興舎、ならびに赤羽正己の活文堂の三者を買収し、活版、石版、写真版、電気版、活字鑄造を業としたが、明治四十一年（西曆一九〇八年）には築地二丁目の帝国印刷株式会社を買収し設備を充実して、営業科目の範囲を拡張し、創業

当時十二万五千円の小額に過ぎなかった資本金も、事業の発展にしたがつてその総額六十五万円、払込済五十五万円に増額せられ、同業者間に重きをなした。

この記録から、東洋印刷株式会社は明治三十九年（一九〇六年）に創立され、最初は信陽堂、猶興舎、ならびに活文堂を買収したが、明治四十一年（一九〇八年）になって帝国印刷株式会社を買収したことが読みとれる。ただし、帝国印刷株式会社の住所については、『活版印刷史』は「築地二丁目」とし、『風俗画報』は「京橋区築地三―一五」としており、両者の記載に食い違いがあることも窺うことができる。

右の二つの記録をまとめてみると、東洋印刷株式会社の創立経緯について異なる記録が残されているだけではなく、帝国印刷株式会社がいつ買収されたかについての記録も異なっていることが分かる。いずれにしても、帝国印刷株式会社が最終的に東洋印刷株式会社によって買収されたのは疑う余地のない事実である。

稲岡勝の研究によると、実は、この帝国印刷は実質的には金港堂の印刷工場が独立したものと違ってよかった。当時、一般的には、東陽堂や金港堂などといった大手の教科書会社は、すでに明治二十年代から自社の印刷所を所持していた。当時「最古最大の教科書肆」と言われた金港堂にしても、教科書の印刷や販売の面で厳しい競争を強いられていた。教科書の需要は新学期の始まりなどの原因によって一気に上がつたり下がったりするので、印刷をすべて専門の印刷所に委ねるのは、会社の経営にとって不安要素となる。そこで、当時各大手出版

社は自分の印刷所を創立して、自社の経営リスクを減らした。特に、日清戦争後、戦勝による意気の高揚に伴い、日本経済が飛躍的な発展を遂げるにつれて、書籍や新聞や雑誌などの印刷の需要も高まってきた。明治二十九年一月二十二日附の『報知新聞』の記事の「製紙業 頗る好況を呈せり、蓋し需要の増加せしため。印刷業 頗る繁忙を極め好景気なりし。」という報道が当時の印刷や製紙の業界の活況をはつきり示している⁽⁹⁾。このような印刷界、出版界の好景気により、明治三〇年前後から、当時付属の印刷所は本社から独立して独自の発展を遂げることが可能になってきた。たとえば、当時の民友社印刷所が民友社から独立したのはその一例である。

続いて、東京都公文書館に所蔵されている帝国印刷株式会社が創立された際の文書「帝国印刷株式会社申請書、目論見書并予算、定款」の一部を引いておく⁽¹⁰⁾。

第六 発起人ノ氏名住所及各自引受株数ハ左ノ如シ（但し、住所は省略。）

一 式百株	岡村竹四 [㊦]
一 式百株	赤羽源治 [㊦]
一 五拾株	杉山辰之助 [㊦]
一 五拾株	岩田僊太郎 [㊦]
一 壱百株	原亮一郎 [㊦]
一 七百株	原亮三郎 [㊦]

右の文書の記録は、『風俗画報』の「社長赤羽源治、重役五名」と

いう記録に合致することが分かる。これらの株主の六人に関する資料を確認すると、原亮三郎は金港堂の社長であり、その息子の原亮一郎は金港堂の取締役である。岩田僊太郎は金港堂の支配人であり、杉山辰之助は元金港堂の社員である。岡村竹四郎は信陽堂の創立者であり、のちに帝国印刷株式会社などを合併して出来た東洋印刷株式会社の創立者でもある。赤羽源治は会津斗南藩赤羽治平友温の長男で、明治三十六年（一九〇三年）十月二十日亡くなった斗南士族であり、明治三〇年（一八九七年）十一月一日に帝国印刷株式会社専務取締役であるという情報しか分からなかった。これらの情報から、金港堂に関する人物の出資額が一番多いことが分かった。したがって、帝国印刷株式会社は金港堂と深く関わっているといえるだろう。

では、金港堂とは、どのような会社なのか。実は、『開国五十年史付録』の「金港堂書籍株式会社」は、金港堂の成立と発展の経緯についてまとめている。ここでは、その中から重要な一部分を引用してみよう（11）。

当時原亮三郎氏其不備を憂ひて一書肆を横濱に開き之を金港堂と稱し、専ら教科書圖書を印行して各地の急に應じたり、時實に明治八年なり。（中略）明治十七八年の交教科書革新の聲起るや、原氏之を諸名士に謀り、時の文部省御用掛森有礼氏の説に聴きて、乃ち金港堂編輯所を設立し（中略）明治二十五年に至り、組織を變更して株式會社と爲し、資本金五十萬圓を以て現稱の金港堂書籍株式會社を設立せり。（中略）是より先き、同社は清國に於て使用すべき教育書出版に着目し（中略）次いで三十六年に及び清

國用出版物に着手すべきの議を定め、亮三郎氏は二社員を伴ひて上海に赴き、種々調査する所ありき。時に上海商務印書館とて印刷兼出版を營める清人の會社あり、我と合同に意あり、數回交渉の末從來の團體を解き、更に彼我對等の權利を以て遂に合同して、新に商務印書館を設立するに至れり。（後略）

上記の引用文によると、明治八年（一八七五年）創業された金港堂は、明治二十五年（一八九二年）金港堂書籍株式会社となり、明治三十六年（一九〇三年）上海商務印書館と提携したことが分かる。これによって、業務の一部も中国に移転した。一九〇三年、『申報』に掲載されたある記事が当時金港堂の状況を報道した。その詳細は下記のようにである（12）。

中国士商欲求日本刊行図書、久称不便。本館知東京金港堂圖書公司在日本設立最久、所刊圖書風行全国、声望素著、特與定約代理。凡金港堂發行書籍、图画、一經出版即行寄到。今將已經到各種牘陳館内、以備士商垂覽、外埠惠寄郵費即將書目送呈。批發面議、函購俱便、價格別克已。一、小学校、中学校、高等女学校、師範学校等教科圖書。一、大雜誌九種教育界、文芸界、軍事界、青年界、婦人界、少年界、少女界、考古界、哲學雜誌。一各種日記類、実用日記、実用懷中日記、家政日記、学生日記、教育家日記、陸海軍人日記、少年日記、英文懷中日記。一、童話及少年各書。一、軍事各書。一、小説及文芸各書。一、専門各書、法制、經濟、哲學、宗教。一、婦人及青年各書。一、各種掛図。一、教師參考

教育各書。一、雑書。「中国の士人や商人が日本で刊行された図書を求めようとする際不便であると久しく言われてきました。本館は、東京金港堂書籍株式会社は日本で最も早く設立された教科書会社であり、刊行した書籍は全国で流行していて、声望がもとより著しいことを存じておりましたので、(今回)特に契約を結んでその図書の販売を代理することになりました。金港堂が発行した書籍、図画はすべて、印刷、出版を終えたら、すぐに商務印書館に郵送されます。すでに届いた各種の書籍は館内に陳列して、士人や商人の皆様のご覧に備えております。当地以外でも、郵送料を送っていただければ、すぐカタログを差し上げます。卸売りをご希望される場合は、面談、書簡、どちらの場合も対応いたします。お値段は大変お安くっております。一、小学校、中学校、高等女学校、師範学校等の教科書。一、大雑誌九種：教育界、文芸界、軍事界、青年界、婦人界、少年界、少女界、考古界、哲学雑誌。一、各種の日記類、実用日記、実用懐中日記、家政日記、学生日記、教育家日記、陸海軍人日記、少年日記、英文懐中日記。一、童話及び少年向けの各書。一、軍事に関する各種書籍。一、小説及び文芸各書。一、各種専門書、法制、経済、哲学、宗教。一、婦人及び青年向けの各書。一、各種の掛図。一、教師用の各種教育参考書。一、雑書。」

右記の広告によると、一九〇三年末、金港堂と商務印書館との提携によって、日本で金港堂が発行した書籍は、印刷されたら、すぐ郵送し上海商務印書館で発売することができるようになった。このことに

よって、多くの日本の書籍が上海商務印書館で購入できるようになった。管見の限り、今まで、一九〇四年帝国印刷株式会社がなぜ梁啓超の『飲氷室文集類編』と『壬寅新民叢報彙編』を印刷したかに関する研究は存在しないが、上記の広告に掲載されたとおりに、一九〇三年末金港堂と提携した商務印書館が金港堂により出版された書籍をたくさん売ることから、商務印書館が、金港堂と深く関わっている帝国印刷株式会社の編集、発行した書籍を販売していた可能性があるのではないかと考える。

この度、筆者は『20世紀上海大博覧』で商務印書館が、下河辺半五郎が編集した梁啓超の『飲氷室文集類編』を販売していたことを新たに確認した⁽¹³⁾。

(一九〇四年六月) 中旬、商務印書館及各書肆經銷梁啓超所著的『飲氷室文集類編』、両大冊、内容分通論、政治、時局、宗教、教育、学説、歴史、伝記、地理、雑文、游記、叢談及小説等、該書在日本出版。(一九〇四年六月) 中旬、商務印書館及び各書店は梁啓超の『飲氷室文集類編』を販売することになった。この書は二冊あり、内容は通論、政治、時局、宗教、教育、学説、歴史、伝記、地理、雑文、游記、叢談及び小説等に分かれる。本書は日本で出版された。」

右の資料から、一九〇四年六月中旬ごろ、商務印書館は、下河辺半五郎により編集され、日本で発行された『飲氷室文集類編』を販売していたことが読みとれる。『飲氷室文集類編』の奥書を確認したとこ

ろ、一九〇四年四月二九日中野鏐太郎により帝国印刷株式会社で印刷され、同年五月二日に日本で発行されたとあった。ゆえに、金港堂の出版物と同じように、帝国印刷株式会社が印刷、出版した書籍は、すぐ上海商務印書館に送って販売することになっていたと考えられる。

以上をまとめてみると、梁啓超の『壬寅新民叢報彙編』と『飲氷室文集類編』の印刷所である帝国印刷株式会社は、一八九七年十月に東京で赤羽源治により創立され、金港堂の創立者である原亮三郎を代表とする原家と深く関わっていた。一九〇七年もしくは一九〇八年に、岡村竹四郎が創立した東洋印刷株式会社により買収された。また、一九〇三年、金港堂と商務印書館との合併によつて、帝国印刷株式会社が日本で発行した書物も上海商務印書館で販売されることになった。一九〇四年、帝国印刷株式会社で印刷された梁啓超の『飲氷室文集類編』はその一例であると考えられる。

二 下河辺半五郎と梁啓超著作の出版

『壬寅新民叢報彙編』と『飲氷室文集類編』の編集及び発行者である下河辺半五郎は如何なる人物であろうか。管見の限り、下河辺半五郎に関する先行研究はあまり見当たらない。中国では、葉叢徳が飲氷室著作の版本にもとづいて、下河辺半五郎に対する研究を行った。ここで、下河辺半五郎に関連する箇所を引いておく⁽¹⁴⁾。

編輯兼発行者「下河辺半五郎」何許人也？ 尽管尋找直接資料未果、

我仍初步認定這是梁啓超為發行著作之便利而用的托名或化名、其依据如下。其一、戊戌变法失敗後、梁啓超艱難地逃脫追捕而亡命日本、慈禧太后一直沒放過他、多次懸賞至十萬兩銀緡拿、尤其在1904年前、梁啓超的所境很不好。為避免諸多麻煩、无奈用「下河辺半五郎」之名。其二、版權頁上寫有「日本各地賣捌所…清国各地賣捌所」、清楚表明此書尽管在日出版、不僅在日出售、還在中国出售、出于对大清国感情、不像日本人当时称中国為「支那」而称「清国」、此舉不是梁啓超作為就很難解了。其三、書的硬皮封面中間印有一个燙金圓形書標、図為二条騰飛的大竜、封底用同図凹凸印、栩栩如生的大竜令中国人振奮、日本人設計絶不可能這樣。其四、『壬寅新民叢報彙編』第23至25的「輿論一斑」、「中国近事」、「海外彙編」三類均為報上有関内容、需重新輯要組合、讀之体会出系梁啓超文筆。其中「中国近事」中有关天津的条目有「允還天津」、「直督密奏」、「会奏新政」、「還津条件」、「還路条件」等十多条、于此可見梁啓超对天津的关心。總上所述、筆者認為「下河辺半五郎」應為梁啓超本人。「編集者であり発行者でもある「下河辺半五郎」は、いったいどのような人物であろうか。彼の身元を直接証明できる資料を収集することがなかなかできなかったけれども、私はやはり、これは梁啓超が自著の発行の便利のために使用した他人の名前か、あるいは偽名であるとひとまず認定しておく。その根拠は以下のようなものである。その一、戊戌变法が失敗した後、梁啓超は苦勞しながら追捕から逃れ、日本に亡命した。西太后は、一向に彼を許そうとせず、何回も十萬兩の銀の懸賞をかけて彼を逮捕しようとしたため、特に一九〇四年

以前の彼は、状況が非常に厳しかった。いろいろな面倒を避けるために、仕方がなく「下河辺半五郎」という名を使った。その二、この本の奥付に「日本各地賣捌所・清国各地賣捌所」とあり、この本は日本で出版されたが、日本だけでなく、中国でも発売されたとはつきり示している。これは大清国に対する愛によるもので、当時の日本人が中国を「支那」と称しているのと異なり、「清国」と称しているから、梁啓超によるものでなければ説明が難しい。その三、ハードカバーの表表紙の真ん中に金付けが施された円形の書標が印刷されており、飛び立っている二匹の大竜が描かれている。その裏表紙も同じ図案で凸版印刷されている。迫力のある大竜は中国人の心を奮い立たせるものである。日本人がデザインしたならば、このような図案にすることは決してあり得ない。その四、『壬寅新民叢報彙編』第二三号から二五号までに掲載された「輿論一斑」、「中国近事」と「海外彙編」三つの項目はいずれも『新民叢報』に関連する内容であり、改めて重要な内容を編集し組合せる必要があり、これを読めば梁啓超が書いたものであると分かる。その中の「中国近事」に、天津に関する項目が「允還天津」、「直督密奏」、「会奏新政」、「還津条件」、「還路条件」など十数条あり、梁啓超の天津に対する関心が窺える。以上述べたところを総合して、筆者は、「下河辺半五郎」は梁啓超本人に違いないと考える。」

葉叢徳によると、下河辺半五郎は梁啓超本人ということになる。その理由は四つある。一つ目は、戊戌変法が失敗した後、日本に亡命し

た梁啓超は清朝政府からの追捕を受けており、厳しい境遇にあったこと。二番目は、一般的に日本人は当時の清朝を「支那」と呼んでいるのに対して、奥付で清朝を「清国」と表記していること。三番目は、中国人を鼓舞するような、飛び立つ龍の姿であること。四番目は、『壬寅新民叢報彙編』の内容からみると、梁啓超が書いたものであると葉氏が考えられること。しかし、本当にそうだったのであろうか。幸運なことに、国立国会図書館や東京公文書館には下河辺半五郎に関する資料が残されていた。これらによって、下河辺半五郎の経歴を知ることができる。

まず、国立国会図書館に所蔵されている『東京府職員録 明治十九年五月一日改正』（東京府職務課編）を確認してみよう（15）。

（府立学校）

師範学校校長和久正辰

師範学校附属小学校三等訓導下河辺半五郎

中学校校長丸山淑人

右の記述から、明治十九年五月一日（一八八六年）の時点で、下河辺半五郎は師範学校附属小学校三等訓導を担当していたことが分かる。

また、東京都公文書館には下河辺半五郎に関する記録が残されていた。ここでは、これらの記録を整理して、文書名と文書の作成時間だけを時系列で取り上げてみたい（16）。

①明治一七年十月十六日 下河辺半五郎築地小学校訓導任減給
(一か所)

②明治一七年十月二十二日 任築地小学校三等訓導 下河辺半五郎 (二か所)

③明治一七年十二月十日 築地小学校訓導下河辺半五郎東京府師範学校附属小学校訓導兼任 (一件態・二件) (二か所)

④明治十七年十二月十一日 任師範学校附属小学校三等訓導築地小学校三等訓導 下河辺半五郎 (二か所)

⑤明治二十二年九月三十日 教員進退之件(東京府尋常師範学校附属小学校訓導下河辺半五郎、東京府尋常師範学校助教諭心得兼務申付他) (二か所)

⑥明治二十三年十一月二十二日 付属小学校訓導増給之件(東京府尋常師範学校付属小学校訓導下河辺半五郎増給) (一か所)

⑦明治二十三年十一月二十六日 自今十七円給与 下河辺半五郎 (一か所)

⑧明治二十五年六月六日 三級俸給与 東京府尋常師範学校訓導 下河辺半五郎 (一か所)

⑨明治二十六年三月三十一日 当分一ヶ月十八円 尋常師範学校訓導 下河辺半五郎 (一か所)

⑩明治三十一年十月二十日 家禄不足額給与願書進達 下河辺半五郎 東京府知事より大蔵大臣へ 内務部第一課 (一か所)

⑪明治三十七年四月個人アーカイブ 内田祥三関係資料 日露戦争記 第九巻 出版者:金港堂書籍 著者名:下河辺半五郎編 (二か所)

右の記録によると、明治十七年(一八八四年)十月十六日下河辺半五郎は築地小学校訓導として務めていた。同年十二月十日、東京府尋常師範学校附属小学校訓導も兼任することになった。のちに、彼は同時に築地小学校三等訓導と東京府尋常師範学校附属小学校三等訓導を担当した。明治三十七年(一九〇四年)、彼は『壬寅新民叢報彙編』と『飲氷室文集類編』を編輯しただけでなく、金港堂書籍より出版した『日露戦争記』も編輯した。そのほか、明治三十七年(一九〇四年)、下河辺半五郎は同時に帝国印刷株式会社と金港堂書籍株式会社の編集者として働いていたことが窺える。

また、筆者は、原敬文書所蔵「雑誌一覧表」(明治三十九年九月調査)の中に下河辺半五郎に関する記録を見つけた(17)。ここでその一部を引用して見てみよう。

題名	年代	記者
少年界	明治三十九年	主筆 神谷徳太郎 記者 下河辺半五郎 中野鏐太郎 笠間哲雄

右記の表によると、下河辺半五郎は、明治三十九年(一九〇六年)金港堂が発行された七大雑誌の一つである『少年界』の記者として働

いていた。稲岡勝の研究によると、当時の金港堂が発行した雑誌の編集などの仕事に関する人材の選択においては、師範学校出身者が多い(18)。そこで、何年間も東京府尋常師範学校附属小学校や築地小学校の訓導を担当していた下河辺半五郎のちに、金港堂の雑誌『少年界』の記者として働いていたとしておかしくない。したがって、下河辺半五郎が明治三十七年(一九〇四年)、主に原家を中心とする金港堂の出資額が高い帝国印刷株式会社の編集者及び発行者を担当する可能性があると推測できるのではないだろうか。

以上より、下河辺半五郎は梁啓超本人ではないことが分かる。また、下河辺半五郎は最初に築地小学校や東京府師範学校附属小学校訓導を担当し、後に金港堂及び金港堂と深く関わっている帝国印刷株式会社で編集者や発行者や記者として働いていたことが分かる。

三 下河辺半五郎編梁啓超著作の影響

下河辺半五郎が一九〇四年編集し、発行した『飲氷室文集類編』と『壬寅新民叢報彙編』は、当時の日中両国ではどれほどの影響を与えたのであろうか。今まで梁啓超に関する研究においては、『飲氷室文集類編』と『壬寅新民叢報彙編』を触れたものは少ないが、ここで、筆者はこの両書について考察を加えたいと思う。

一九〇五年、何肇一が編集し、上海広智書局が出版した『分類精校飲氷室文集』の「凡例」で、『飲氷室文集類編』について言及されている(19)。

一 頃見坊間亦有翻印本集者、名為『飲氷室文集類編』、惟是只圖牟利、錯誤極多。是編校勘精審、購者請為注意。「一 近ごろ本屋にも本集(筆者注一九〇二年に何肇一により編集され広智書局より発行された『飲氷室文集』を指す。)を翻刻して『飲氷室文集類編』と名付けたものがあるが、ただ儲けを出すために出版したもので、誤りが極めて多い。この『分類精校飲氷室文集』は校勘が精密ですから、購読者はご注意ください。」

何肇一は、下河辺半五郎が一九〇四年に『飲氷室文集類編』を編集した際、梁啓超本人の許可を得ることなく、何肇一自身が一九〇二年に編集し、広智書局より出版された『飲氷室文集』を翻刻した、と指摘した。加えて、下河辺半五郎の編集した『飲氷室文集類編』は誤謬が非常に多いのに対して、自分が編集した『分類精校飲氷室文集』は校勘が精密で詳細であると述べている。もしそれが事実だったら、当時日本に亡命していた梁啓超は、下河辺半五郎や金港堂や帝国印刷とは直接的な関りがないことが推測できる。ただし、何氏の最後の「購者請為注意(購読者はご注意ください)」という文言から、当時『飲氷室文集類編』は日本だけではなく、清国でも発売されたのは、何氏が編集した『分類精校飲氷室文集』の販売と激しく競争して、その販売にいくらかの影響を与えたことも示唆しているのではないだろうか。

筆者が調べた限りでは、梁啓超の自著や年譜などには、下河辺半五郎が編集した『飲氷室文集類編』と『壬寅新民叢報彙編』に関する記

録は見当たらないため、下河辺半五郎が編集した両書は梁啓超本人の許可を得たかどうかは確認できない。では、前述何氏の批判を踏まえて、一九〇二年出版された『飲氷室文集』と一九〇四年に出版された『飲氷室文集類編』と一九〇五年に出版された『分類精校飲氷室文集』三つの書物の凡例を比較することで、その間の異同を見つけ出し、相互関係を説明したい。ここで、両書の凡例を挙げて比較して見てみることにする。

①何肇一編『飲氷室文集』の「編輯例」(20)

一本編纂集先生自丙申至壬寅七年間之文年為一集丙申以前先生未献身於文界撰著頗少其有一二即附入丙申集

一每集中略以文字之問題性質分別部居

(中略)

一壬寅集中之文間有登於報中而稿未全脫者只得仍旧

(後略)

〔一本作品は梁啓超先生の、丙申（一八九六年）から壬寅（一九〇二年）までの七年間にわたる文章を集めており、一年ごとに一冊とする。丙申年以前は、先生はまだ文学界に身をささげていないため、著作は極めて少ない。その一部分を丙申集に入れる。一各冊に収められる著述については、大まかにその性格によって分類する。〕

(中略)

一壬寅集に収録された著述の中には、雑誌に連載されまだ完結していないものがある。やむを得ずそのまま（発表した部分だけ）

収録する。(後略)」

②下河辺半五郎編『飲氷室文集類編』の凡例(21)

一何輯飲氷室文集用編年體然往往有一文而成於兩年者前後遙隔閱者每苦不便是編分類彙輯取便檢閱體例高下在所不計

一每類文字略依性質分別先後並於每題下註明年分俾閱之可知作者思想之進步

(中略)

一何輯以壬寅十月為止是編斷至癸卯春季蓋作者文字自是以後未公諸世也至私家函札仍遵何輯(後略)

〔一何肇一氏は、編年体で『飲氷室文集』を編輯した。しかし、一つの著述が二年間にわたって書き上げられることがしばしばあり、文章の前半部と後半部がずいぶん離れているため、不便で読者はいちいち苦しむ。この『飲氷室文集類編』は、閲覧の便利のために、(著述)を分類して編輯した。体裁のよし悪しはさておく。〕

一各種の著述は、その性格によって並べられ、その題目の下に注で年月日を明らかにする。これを読めば作者の思想の進歩が分かる。〕

(中略)

一何氏の『飲氷室文集』は壬寅（一九〇二年）十月までの文章を集めているが、この『飲氷室文集類編』は癸卯（一九〇四年）の春までの文章を集めている。それ以来、作者の文章は、世に公開されていないためである。書信は、元のように何氏の体裁に従って編輯する。(後略)」

③何肇一編『分類精校飲氷室文集』の凡例(22)

一本局何君前輯飲氷室文集用編年體然往往有一文而成於兩年者前後遙隔閱者每苦不便又前輯本已售罄茲謀再印用是分類彙輯取便檢閱

一每類文字略依性質分別先後並於每題下注明年分俾閱之可知作者思想之進步

一前輯本以壬寅十月爲止是編斷至乙巳夏季蓋所搜之文至爲詳備一項見坊間亦有翻印本集者、名為『飲氷室文集類編』、惟是只圖牟利、錯誤極多。是編校勘精審、購者請爲注意。

「一その前、本局の何肇一氏により編輯された『飲氷室文集』は編年体を用いているが、著述が二年間にわたって書き上げられることがしばしばあり、文章の前半部と後半部がずいぶん離れているため、不便で読者はいちいち苦しむ。また、以前編輯したものはずでに売りきった。そこで、今回再印刷する際、閲覧の便利のために、(著述を)分類して編輯した。

一各著述は、その性格によって前後に分けて並べ、題目の下に注で年月日を明らかにする。これを読めば作者の思想の進歩が分かる。

一以前に編輯した『飲氷室文集』は壬寅(一九〇二年)十月までの文章を集めたが、この『分類精校飲氷室文集』は乙巳(一九〇五年)の夏までの文章を集め、その文章は詳細で、しっかりと整っている。

一近ごろ本屋にも『飲氷室文集』を翻刻して『飲氷室文集類編』と名付けたものがあるが、ただ儲けを出すために出版したも

ので、誤りが極めて多い。この『分類精校飲氷室文集』は校勘が精密であるため、読者はご注意いただきたい。」

上記の①から、『飲氷室文集』は、一九〇二年に何肇一が、梁啓超の丙申年(一八九六年)から壬寅年(一九〇二年)までの著作を大まかに時系列で編集したもので、『丙申集』、『丁酉集』、『戊戌集』、『己亥集』、『庚子集』、『辛丑集』、『壬寅集』、『壬寅集補遺一』、『壬寅集補遺二』から構成されているということが分かる。②からは、下河辺半五郎は『飲氷室文集類編』を編集するにあたり、まずその性格によって著述を分類し、各類の中では時系列順に並べていることが分かる。特に、②と③の傍線部から、両書の凡例には完全に一致している部分が多いことが分かる。凡例の内容も文型も編集の基準も大体同じであることから、何肇一が一九〇五年に『分類精校飲氷室文集』を編集した際、章立ての設定や内容の選択の面で、下河辺半五郎が一九〇四年に編集した『飲氷室文集類編』を模倣した可能性が高いことが窺える。もしそうであれば、何氏の凡例の最後の一條「頃見坊間亦有翻印本集者(近ごろ本屋にも本集(筆者注:一九〇二年に何肇一により編集され広智書局より発行された『飲氷室文集』を指す。))を翻刻したものがあり)」と矛盾していることになる。

また、この度、筆者が『飲氷室文集類編』と『分類精校飲氷室文集』の目録を確認したところ、いずれも上、下二冊に分かれているだけでなく、各項目の文章の順番も大体同じであることが分かる。そして、目録の分類の面では、何氏の『分類精校飲氷室文集』と下河辺氏の『飲氷室文集類編』は殆ど一致している。ただし、「俠情記傳奇」が『分

類精校飲氷室文集』では「補遺」に入れられており、『飲氷室文集類編』では「韻集」の下の「曲本」に入れられている点、「學術」の項目が『飲氷室文集類編』では下巻にあり、『分類精校飲氷室文集』では上巻に収められているという点だけが異なる。上記以外に、一番大きな違いは、『分類精校飲氷室文集』に集められた文章は『飲氷室文集類編』より量が少し多いことである。これは下河辺氏の編集時期は癸卯年の春までであるが、何氏の編集時期は乙巳年の夏までだったからであろう。以上から、何氏が凡例の最後の一条で指摘した下河辺半五郎は何擎一の『飲氷室文集』を翻刻したことは、考えられない。反対に、何擎一の『分類精校飲氷室文集』のほうが、下河辺半五郎が編集した『飲氷室文集類編』を参考に編集した可能性が高いと思われる。

続いて、下河辺半五郎編『壬寅新民叢報彙編』を取り上げて見てみよう。実際の書物を確認したところ、この本は表紙と目録と本文と奥付からなっている。遺憾なことに、この本の編集凡例など関連する明確な情報はいつさい見られないため、この本の編纂意図などを考察するのがよりいっそう困難になる。筆者が『新民叢報』（一九〇二年、第一号から第二四号まで）と『壬寅新民叢報彙編』を比較してみると、『壬寅新民叢報彙編』の中に入る文章は大体同じであり、一部の文章名は変わったり章立てを省略したりすることがよく見られ、一九〇二年の『新民叢報』で連載が未完成の文章は、下河辺半五郎編『壬寅新民叢報彙編』には、往々にしてその完全版が集められたことが分かる。これは一九〇四年下河辺半五郎が『壬寅新民叢報彙編』を編集する際、読者がよりやすく全面的に文章を理解させるために、一九〇二年末（第二四号）までにまだ掲載し終っていない内容を加えたためである。

う。

以上の考察をまとめると、何擎一が一九〇五年編集し、上海広智書局が出版した『分類精校飲氷室文集』の「凡例」では、下河辺半五郎が編集した『飲氷室文集類編』は『飲氷室文集』を翻刻したものであると厳しく批判されている。しかし、筆者がそれぞれの「凡例」や具体的な内容を比較して確認したところ、『飲氷室文集類編』は、内容の面だけでなく、章立てなどの面でも『飲氷室文集』とだいぶ異なっている。一方のちに出版された『分類精校飲氷室文集』のほうは『飲氷室文集類編』と完全に一致しているところが少なからず存在していることから、反対に何氏が一九〇五年に『分類精校飲氷室文集』を編集した際、下河辺氏より影響を受けた可能性があると考ええる。また、下河辺半五郎は『壬寅新民叢報彙編』を編集する際、題目を修正したり内容を加えたりして、読者に対して配慮したことが分かる。その他、当時の出版界において、個人の著作権の保護に対する意識は希薄であったことも窺える。

おわりに

本稿では、日本における梁啓超著作の出版、とりわけこれまであまり注目されていなかった下河辺半五郎編『飲氷室文集類編』と『壬寅新民叢報彙編』に着目して、両書の出版に深く関わっている帝国印刷株式会社、下河辺半五郎、および同じ時期に出版されたほかの書物との関わりについて考察を行った。帝国印刷株式会社は一八九七年に創

立された原家を中心とする金港堂と深く関わっており、一九〇六、七年頃株主である岡村剛四郎が創立した東洋印刷株式会社に買収された。一九〇三年の末頃、金港堂と提携したばかりの上海商務印書館が、金港堂が発行した書籍の中国での販売を代行したことは、一九〇四年帝国印刷株式会社が梁啓超の著作を出版する契機となった可能性が高いと考えられる。この両書の出版は当時日本に生活している留学生や華僑らがよりよく梁啓超の思想などを理解するツールを作り、日本で出版された梁啓超の著作があまり容易に入手できない当時国内にいる中国人に便宜を与えることとなった。また、金港堂や帝国印刷株式会社がひいては商務印書館もこれによって利益を得ることとなった。

また、今回の検討を通して、下河辺半五郎は梁啓超本人であるという先行研究の説は誤りで、下河辺半五郎は最初に築地小学校と東京府高等師範附属小学校の訓導を担当し、のちに金港堂および帝国印刷株式会で編集者、発行者及び記者として働いていたことが分かった。最後に、両書と関連する書籍との比較を通じて、両書がのちに出的書籍に少なからぬ影響を与えたことが窺える。特に『飲氷室文集類編』は日本人により編集され、日本で発行された最初の梁啓超の作品集として、のちの『分類精校飲氷室文集』、ひいては『飲氷室全集』や『梁啓超全集』などが編集された際、重要なテキストとなった⁽²⁾。そのほか、『飲氷室文集』と『飲氷室文集類編』と『分類精校飲氷室文集』との比較を通じて、明治末期の日中両国における、書籍の著作権に関する研究の方向性を開拓しうると考える。

注

(1) 『梁啓超与飲氷室』（郭長久編、天津戸籍出版社、二〇〇二年）に収録されている李世瑜の「飲氷室著作的版本」という論文に

「所謂『壬癸旧輯』是指梁啓超袁輯成書的最早版本、即他于光緒壬寅（二十八年、1902年）、癸卯（二十九年、1903年）两年的部分著作編為『飲氷室壬寅癸卯全集』、由日本東京新智学社石印（下称『日本石印本』）、線装、寒斎度藏（見書影）。

（中略）這部『全集』只標明梁啓超著、不知編者為誰、也無出版日期。」とあり、同書に収録されている葉德輝の「『下河辺半五郎』」は梁啓超一也談飲氷室著作的版本」という論文に「近日、我将『飲氷室壬寅癸卯全集』和『壬寅新民叢報匯編』做一較比、（中略）至于它是何人何年袁輯、需進一步探討、而從紙墨印刷等看、它的確很可能在1904年稍後一段時間內發行。」とあるなどから、これまでの研究によると、『飲氷室文集類編』は日本人により編集され、日本で発行された最初の文集であると思われる。

(2) 注(1)に揚げた書籍において、「飲氷室著作的版本」という論文で梁啓超著作の各版本を検討し、『飲氷室文集類編』についても少し触れている。また、同書に葉德輝は「『下河辺半五郎』」は梁啓超一也談飲氷室著作的版本」という論文で梁啓超著作の版本を考察し、更に「下河辺半五郎」は梁啓超本人であるという結論を出した。

(3) 『飲氷室文集』の実物を確認したところ、何天柱が編集した『飲氷室文集』は光緒帝二十八年（一九〇二）十月に印刷され、広智書局より光緒帝二十九年（一九〇三）二月に発行されたこと

が分かる。なお、広智書局は、康、梁を代表とする維新派が「保皇會」の名義を以て、香港や北アメリカ、オーストラリアなどの華僑に株の売買を通じて資本金を集めさせ上海で創立した文化事業に関する機関である。馮鏡如は取締役を担当し、何肇一は事務をつかさどる。その後、北京琉璃廠に支局も設置された。

- (4) 『飲氷室文集』（何天柱、広智書局、光緒二十九年、三十年）の「編輯例」に「一本袁集先生自丙申至壬寅七年間之文年爲一集丙申以前先生未獻身於文界撰著頗少其有一二例即附入丙申集」とあるが、『飲氷室文集類編』（下河辺半五郎、帝国印刷株式会社、明治三十七年）の「飲氷室文集類編凡例」に「一何輯以壬寅十月爲止是編斷至癸卯春季蓋作者文字自是以後未公諸世也至私家函札仍遵何輯例概付闕如」とある。
- (5) 「金港堂の七大雜誌と帝国印刷」（『明治出版史上の金港堂』社史のない出版社「史」の試み、皓星社、二〇一九年）を参照。
- (6) 東陽堂編『新撰東京名所図会』、第三〇編、京橋区の部 卷之二『風俗画報』臨時増刊第二三二一、三頁。
- (7) 「東洋印刷株式会社取締役理事 岡村竹四郎君」（『信用名鑑』、信用名鑑発行所、一九一一年、五八四頁）を参照。
- (8) 『活版印刷史』（川田久長著、山本隆太郎編、印刷学会出版部、一九八一年、二〇二頁）を参照。
- (9) 明治二十九年一月二十二日附の『報知新聞』に「商工業に及ぼせる戦争の影響」と題した記事を参照。
- (10) 「帝国印刷株式会社申請書、目論見書并予算、定款」、東京都公

文書館蔵「第六課文書類別」、明治三〇年、農商。

- (11) 「金港堂書籍株式会社」（『開国五十年史 附録』、大隈重信編、開国五十年史発行所、明治四十一年、二九二〜二九三頁）を参照。
- (12) 一九〇三年二月二〇日附『申報』に掲載されている「上海商務印書館廣告」と題した記事を参照。
- (13) 夏冬元主編『20世紀上海大博覧』、文匯出版社、二〇〇一年、五四頁。
- (14) 葉叢德『下河辺半五郎』応是梁啓超一也談飲氷室著作的版本」、郭長久編『梁啓超与飲氷室』、天津戸籍出版社、二〇〇二年、一三三頁。
- (15) 国立国会図書館蔵『東京府職員録』、東京府職務課編、明治十九年五月一日改正版。
- (16) これらの文書はすべて東京都公文書館から申請することができる。
- (17) 『原敬関係文書 第八巻 書類篇五』、日本放送出版協会、昭和六年、五八九〜五九九頁。
- (18) 稲岡勝「金港堂の七大雜誌と帝国印刷」（『出版研究』、二三、一九九三年、一七一〜二二一頁）に「人材の点に目を向けると、編集者には師範学校出身者の多いのに気がつく。元来が教科書を中心とする教育書肆だから、社風のカラーを破るような人物の登用はできなかったのかも知れない。いきおいジャーナリズムのセンスのかけた人選に落ち着く。『青年界』（森桂園）、『婦人界』（野田滝三郎）は、いずれも高等師範学校出身である。」という記述から、当時の金港堂の編集者は多く師範学校出身者を

登用していたことが分る。

- (19) 「凡例」(梁啓超著 何肇一編『分類精校飲氷室文集』、上海広智書局、一九〇五年)を参照。

- (20) 「凡例」(梁啓超著 何肇一編『飲氷室文集』、上海広智書局、一九〇二年)を参照。

- (21) 「飲氷室文集類編凡例」(『飲氷室文集類編』、梁啓超著、下河辺半五郎編、一九〇四年、帝国印刷株式会社)を参照。

- (22) 注(19)に同じ。

- (23) 梁啓超著、夏曉虹 陸胤校『新史学』(商務印書館、二〇一四年)に「『中国史序論』内分八節、(中略)その中、署名『氏蒙神戸半五郎』編輯併發行的『飲氷室文集類編』下冊(東京帝国印刷株式会社 1904年版)所載版本、時代較早、且經過校勘、較為可靠。本次校定、以下河辺半五郎『飲氷室文集類編』為底本、參校『清議報』及『飲氷室合集』本(中華書局1936年版)」とある。張品興編『梁啓超全集』(北京出版社、一九九九年)に「(中国地理大勢論)今以下河辺半五郎所編『飲氷室文集類編』1904年初版本為底本、以『新民叢報』及『飲氷室合集』參校。」とある。

(ちょう しゅくくん、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学)

On the Publication of Liang Qichao's Works: an analysis focusing on *Renyinxinmincongbaohuibian* and *Yinbingshiwenjileibian*

Shujun ZHANG

Key Words: Liang Qichao, the publication, *Renyinxinmincongbaohuibian*, *Yinbingshiwenjileibian*

Liang Qichao lived in exile in Japan for 14 years from 1898 to 1912. During his stay in Japan, he wrote numerous articles and books, most of which were published in journals he founded. However, *Renyinxinmincongbaohuibian* and *Yinbingshiwenjileibian* are special cases, which were edited by a Japanese named Shimokawabe Hangoro and published in Tokyo in 1904. Focusing on these two books that have not received much attention, the paper investigates the publishing house of the two books, Teikoku Printing Co., LTD., the editor, and Liang Qichao's related works during the same period, so as to figure out the editing and publication status of these two books and their influence on the later collections of Liang Qichao's works and get a glimpse of the publication of Liang Qichao's works during his early life of exile in Japan.